

NPO 法人 日本ビオトープ協会

第9回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介

◇顕彰委員会委員長の講評：『ビオトープフォーラム in 東京』（2017年6月2日）にて第9回ビオトープ顕彰に応募された作品の中で受賞された7件につきまして講評させていただきます。



◎「ヤマノイエプロジェクト」は、海拔800m台箱根の国立公園内別荘地里山ビオトープであります。田賀先生が設計、イビデングリーンテック、静岡グリーンサービス等が施工管理しています。生物多様性に関しまして、郷土種を中心に136種を移植して新たに里山空間を整備し、国立公園内ということで施工にあたっての制約が多い中で、自然林の景観を尊重した理念が高く評価され技術特別賞となりました。

◎福岡工業大学の「里山・ビオトープ」は、大学内の坂井先生等、ビオトープ研究会が中心となりまして、環境教育と地域連携を実践的に行う場として里山空間とビオトープを造成しておられます。すでに設置されてから10年余が経過しており、43回の自然観察会を開催し、延べ1300人以上の方々が参加している、ということで環境教育賞とさせていただきます。

◎旭化成守山製造所の「ハリヨ保全池」は、ラーゴが設計施工をし、まだ整備されてから1年余ですが、金森自治会、琵琶湖博物館などの協働が図られているビオトープであり、優れたビオトープ活動として評価させていただきました。ハリヨの本来の生息地としての湧水池の環境を再現し、従業員の皆さんや地域との連携も図られておられ環境活動推進賞といたしました。

◎静岡ガス・静岡支社の「ふれあいガーデン」はCSR特別賞でございます。整備後6年を経過し、都市の中にある会社敷地内のビオトープであります。地域のコミュニティ活動・CSR活動として、身近な自然教育の場として活発な環境教育の活動を行っておられます。200種以上の植物種、鳥類30種、その他希少な静岡メダカ原種をはじめとする多様な生き物の生育・生息の場となっています。

◎クリーンいわて事業団の「いわてクリーンセンターのビオトープ」は、小岩井農牧の設計・施工により、2005年に設置されており、第1回ビオトープ大賞を受賞しているビオトープであります。今回表彰させていただいたのは、その後現在までしっかりと質の高い維持管理が行われており、特に、ヒメビシは岩手県内唯一の生育地となっている他、植物だけでなく動物も含め10種以上の環境省のレッドリスト掲載種の保護活動、維持管理講習会などを継続的に実施している点を評価し維持活動功績賞といたしました。

◎清水川の環境を守る会の「清水川ビオトープ」は、住宅地を流れる農業用水の改修工事に伴い、2013年に親水空間を整備し、その整備と活用が熱心に行われてきています。3面張りの用水路を親水空間に改変し、子供達の環境活動だけでなく、生物相の調査、絶滅危惧種の保護・育成も行われており、久郷一樹園とも連携をとりビオトープ管理のモデルケースとして評価できることから審査委員長賞といたしました。


◎アイシン精機、エイディーグリーンの「アイシンエコトピア」は、2007年に設置されてからすでに10年が経過し、工場敷地内には充実したビオトープが形成されています。COP10の愛知ターゲット、トヨタ自動車の「トヨタ環境チャレンジ2050」と関連し、地域と連続した生態系のネットワークを重視した自然を構築しているとともに、多彩な環境活動を展開している優れたビオトープであります。2010年に顕彰委員長賞を受賞していますが、その後新たな展開を行う活動や継続的な維持管理の努力を高く評価し、今回ビオトープ大賞となりました。

以上簡単でございますが、各表彰をさせていただきましたビオトープに対し講評ご紹介をさせていただきました。受賞された皆さまのご努力に敬意を表します。


（横浜国立大学名誉教授・前学長、自然環境復元学会会長、協会代表顧問 鈴木邦雄顕彰選考委員長）

◇ビオトープ大賞


【下記各顕彰書類より転記】

名 称	アイシンエコトピア
受賞者	アイシン精機株式会社、株式会社エイディーグリーン
<p>【テーマ・概要】</p> <p>“エコトピア” 生きものが安全快適に生息できる環境づくりを目指して</p> <p>自動車部品製造業者の当社は、「ものづくり」と「自然」との共生を目指し、エコトピアを作りました。</p> <p>エコトピアは、工場製造工程から発生する廃棄物を再資源化する施設（エコセンター）と、緑や水で形成された多様な生物の生息施設（エコトープ）から成っています。2010年6月には、第2回ビオトープ顕彰自然創出部門の顕彰委員長賞を受賞しました。この受賞を機に更なる生物の多様化を目指すべく、生物の目線に立つてさまざま工夫や、エコトープの改修をおこないました。また、地域の水族館と協業し、絶滅危惧種の保全も行っています。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】</p> <p>① ビオトープ管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・草刈 自然な形で形成（多様な空間を創るように工夫） ・生物維持 知多半島在来種の住居設置・育成保全 ・樹木管理 「アイシンの森」の育成（社員が植樹） <p>② エコ農園管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農作物栽培 無農薬・有機栽培（自社製造堆肥使用） 子供たちとの体験学習実施 <p>③ 廃棄物の資源化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生ごみ+刈草混合発酵による堆肥製造 ・廃レンガ、廃プラ破碎等により資源化 	
 <p style="text-align: right;">アイシンエコトピア全景</p>	


◇審査委員長賞

名 称	清水川（しょうずがわ）ピオトープ
受賞者	清水川の環境を守る会
<p>【テーマ・概要】 住宅街を流れる河川的环境保全改修工事に伴い、2013年3月に子供達が安全に川に親しめ、安心して生物観察が出来るようにと、川中の4ヶ所に玉石を敷き詰めた木製の観察テラスが設置された。自治会と協力して、子供達の更なる環境学習の場となるよう個体数の少なくなった「バイカモ」「セリ」「ミクリ」などを植え、生物の棲家や産卵場所を作り、近隣の小学校や幼稚園や各々のPTAや子供達と共に、生物の観察会や多くの生物の生態系を守ろうと熱心な保護活動に取り組んでいる。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 年間を通じた湧水により、絶滅危惧種を含む「トミヨ」「ヨシノボリ」「カワムツ」「スナヤツメ」などの珍しい魚類が今も生息しており、これらの魚類の営巣となる「バイカモ」「ミクリ」「マコモ」「セリ」等の貴重な水生生物や「ゲンジボタル」「ハイケボタル」「ハグロトンボ」「ミヤマアカネ」等の昆虫や「カワセミ」「マガモ」などの鳥類を含め多くの生物を観察する事が出来る貴重な水辺空間となっている。河床部のコンクリートを湧水により施工が出来なかったことが幸いし、絶滅危惧種Ⅱ類の「トミヨ」「スナヤツメ」の営巣に必要な藻草類（バイカモ&ミクリ）の補植を続けている。 定期的な清掃活動と共に生息生物観察ラリーと銘打ち、地元の住民や地域の子供達の参加の元に補植した藻草類の繁茂の状況やその後の生息生物の個体数の変化や種類を観察・確認し記録を取って保護活動に活かしている。</p>	
	

◇維持活動功績賞

名 称	いわてクリーンセンターのピオトープ
受賞者	一般財団法人クリーンいわて事業団、株式会社エコリス
<p>【テーマ・概要】 このピオトープは希少植物の保全を目的に作られたものだが、10年以上維持し続けた結果、保全対象とした植物だけでなく、水生昆虫も豊富に生息するようになり、地域の生態系の一担を担うピオトープとなっている。このピオトープの最大の特徴として、アメリカザリガニが侵入していないことから、ヒメビシやイトモ、ナガエミクリなどの水生植物の絶滅危惧種が豊富に生育しているだけでなく、ゲンゴロウやクロゲンゴロウ、マルガタゲンゴロウ、キベリヒメゲンゴロウ、ガムシ、アカハライモリ、トウキョウダルマガエル、ドジョウといった水生動物の絶滅危惧種も数多く生息していることである。なお岩手県内では、ヒメビシは現在このピオトープが唯一の生育地となっている。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 整備方針としては、人が管理するエリアと管理をしないエリアを分け、管理するエリアでは草刈りをする事により、池の開放水面の維持や低茎草本群落の維持に努めている。管理をしないエリアではヨシやガマといった高茎草本が繁茂している。このようにエリア分けをすることにより、多様な環境を維持することで、多様な生態系を維持している。</p>	
	

◇CSR特別賞

名 称	静岡ガスふれあいガーデン
受賞者	静岡ガス株式会社
<p>【テーマ・概要】 都市環境の中にある当社の敷地内に多様な生物を誘致して、豊かな生息環境を作り、観察会や釣り・どんぐり拾いなどの体験を通して、身近な自然教育の場として社会に貢献することを目的に作ったものである。園内には誘致の基本となる植物が200種類以上あり、これまでに鳥類30種、爬虫類3種、両性類3種、魚類10種、貝類5種、甲殻類6種が生息し、昆虫類はまだ調査中ではあるが1000種を超えると思われる。又、当地は静岡の野生のメダカ（静岡メダカ）が生息する県下唯一の場所でもあり、西の池を中心に大切に保存している。こうしてつくられた当地は現在多くの子供達や観察者に多いに活用され喜ばれている。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 水域と陸域のそれぞれに多様な生物が生息できる環境を整える。水域として数個の池があり、西の池から水をポンプアップして循環させ、園内に緩やかな流れを作った。そこに水生生物を繁殖させてエビやヨシノボリのための隠れ場を設けた。流れの泥の中にはシジミやドブガイが繁殖しており、ドブガイはタナゴの産卵の宿主として重要である。南の池には中の島があり、毎年カルガモが繁殖する。陸域には多種類の野生植物や実のなる木を植えて、生物の好む環境を作り出し、多様な昆虫や野鳥を呼び込んでいる。又、樹木のチップや枯葉を多量に積んでカブトムシの大繁殖地を作っている。</p>	
	

◇環境活動推進賞

名 称	ハリヨ保全池
受賞者	旭化成株式会社守山製造所、株式会社ラーゴ、金森自治会湧水公園を守る会、滋賀県立琵琶湖博物館
<p>【テーマ・概要】 琵琶湖湖東地域に位置する旭化成株式会社守山製造所では、琵琶湖とのつながりを意識し、その水源地のひとつである工場とその周辺に生息する生物の再生をテーマに、絶滅の恐れがある淡水魚「ハリヨ」の保全に取り組んでいる。 守山製造所は、地下水を冷却水として使用しており、その不純物の混ざっていない地下水は、周辺の河川を通じて地域の農業用水として利用されている。工場を構える以前、この地には湧水池があり地域の水源となっていた。現在は、その湧水池に代わり守山製造所が地域の水源の役割を果たしている。 かつての湧水池にはハリヨが生息していたという情報もあり、地域ならではの生態系の保全とその活用を通じて地域に貢献することを目指し、ハリヨの保全に焦点をあてたビオトープ整備を行った。 ハリヨの保全は、地域の保全団体や博物館等の専門家と連携し取り組んでいる。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 地域の保全団体や専門家と連携し、生息に適した条件を効果的に盛り込んで整備した。ハリヨの本来の生息環境である湧水池の環境を再現するため、水深や流速だけでなく、埋設したパイプから細礫を通じて地下水を湧出させるなどの工夫を行った。成魚の生息場所となる深場や、稚魚の生息場所となる流れが緩やかな水域を植生基盤や自然石を適切に配置して造った。産卵場所や隠れ場所を確保するため、護岸の一部は石積みとし、池底にも適度に自然石を配置した。さらに、池の岸や中央部にはスゲ類等の水生植物を植栽した。また、餌となる底生動物や地域のトンボ類等にも配慮し、これら水生生物の生息に適した浅い湿地を造った。なお、池に植栽した水生植物の苗は地域遺伝子に配慮し、湖東地域産を使用した。 整備後は、地域住民などが参加する自然観察会を開催し、従業員とその家族によるハリヨのモニタリングを兼ねた観察会やトンボ類などを対象とした地域と連携した生物多様性の普及啓発を行っている。</p>	



◇環境教育賞

名 称	福岡工業大学 里山・ビオトープ
受賞者	福岡工業大学 社会環境学部
<p>【テーマ・概要】 テーマ：福工大里山・ビオトープ研究交流活動と実践的な環境教育の促進 概要：福工大ビオトープ研究会は、地域の自然環境の保全と再生・創生を目的に構内の里山の麓にビオトープを造成し、自然環境に近い状態を維持保全しながら環境教育の場として活用している。里山・ビオトープネットで地域交流や大学間環境連携を進めなら、環境人材育成を行っている。学生参加メンバーは約20名。本学のビオトープ活動の目標は、地域の自然の再生と創生。里山・ビオトープを活用した環境教育の一環として、地域住民との交流を春、夏、秋、冬に自然観察会を開催。現在まで43回の自然観察会を実施し、延べ参加者数が1歳から70歳台まで1,382名になった。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 2006年2月に本学構内の里山の麓に裸地の状態から直径約10mの池を作り、深さ約1.5mで近隣の水田の土をゴムシートの上に被覆、大小の石を配置して、可能な限り自然状態を維持保全しながら管理している。池の水は、雨水のみで良好な水環境を維持している。その中で、特に、初夏に里山・ビオトープ周辺の通路を確保、生態系が繁殖しやすいように池の中のヒメガマの適正な管理などを行っている。里山・ビオトープ周辺で約300種の動植物が確認されているが、自然状態を維持し、500種程度の生物多様性を目標にしている。また、福岡県内外にビオトープネットワークを構築し、近隣のビオトープ活動への参加・交流を進めながら自然共生社会に少しでも貢献できる活動に繋げていく。</p>	



◇技術特別賞

名 称	ヤマノイエプロジェクト
受賞者	田賀意匠事務所、イビデングリーンテック株式会社、株式会社静岡グリーンサービス
<p>【テーマ・概要】 当該計画地は、富士箱根伊豆国立公園内に位置し、神奈川県足柄下郡箱根町仙石原の別荘地で標高840mから869mの傾斜地の落葉広葉樹林である。当該計画地は、倒木の年輪と踏査概観から40年以上の自然な状態が続いていたと考えられ、ヤマモミジ、ミズキ、エゴノキ、ヤマボウシを中心とした冷涼な落葉広葉樹林で、箱根の自然林の特徴であるヒメシャラも多く見られる。計画地は、国立公園内にあり、建築エリア外は極力多くの自然植生の保全を目指している。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 計画地の特徴性は、長らく人の被圧が少なかったために自然のヤマツツジ、マメザクラなどが点在している。基本的にこれらの自然の樹木、地被植物の保全を中心とした外構計画を行う。管理は移植した地被植物の定着を確認しながら除草を中心とした順応的管理を行う。</p>	

